

當日奇觀

三



鑄日奇觀卷之第三

鞆晴空夫婦再生の縁とひす

（人鞆家より生れ）頃豈後久安家の領園にて園司代と
至く取うち那月と號した園人の鞆の大領をもとてあ
わて嫡子へ昇せり次男小治郎日本にて生れ活々小治の優く
まことに詩書管経の外書画の工あ鄙べの類のままで才
ありと人をもてゆるも妻と焉する日都と名づく園司乃
館す宮仕侍から父の大領身なりしに經母のそがへて二男之
高祖かなるお家業と號さむと小治の園司是地すある
はまかずまかと生れぬをち在京のう紀の何事娘初出
とつと娶り偕老のふらわみに善きう文の墳墓をもて

卷之三

（くみ）後の者と圓司の恩顧のゆゑもゆあらまことんへやと
ねじへとて圓司其のヤリと衣服の方もんの類がまくばらで
きさくの頃妻をもてる從者西二人を賣へ難波津より船をよ
ひくもうぐきを出すの海舟のよもよと分うがてすまわ
（の）のよせとまわり人一升千金と妻をもてて酒をかゝづけとお
キ夜をもまへ舟やで敵を居たる船の者ともいへひきま
くまかうひどまくとぞうへぬ甚く体強體ほの間よ海賊の
まも横行く往來の客船とりやすくと小治即ちとてもあらく
不虞のあもぐれりんくどう海賊の攻めしれ熱狂とまくと充竟
の者及小治帝が船のう器を調ひのれ己が船の後を小治駆逐
てこひくとおもとまことに己が船すくとまくとおもと小治帝

日を失ひ刀を失ひ走れと有事の後海賊より侵者の後
も生ひてよしゆく海より水主の事へやうする衣服をど處
方して賊船が遙に漕云ひ物依を失ひ往來でまじめにす
往き海の邊をよしゆく伊テ傷きせば併ても賊主と云ふと謂
ふと云はれ云泄人とはひそかと云ひて死を軍から離れて家を守
とソモササギの海賊はわざに嫁すあまともいまとことなる事と
我恩婦と云ひてねづかくとひきゆきとやうひをひきて厚
そらうと不穏眼をまつてあまゆきひをひきて厚
とくねじて頭をむけたまひを敵と見て參と假に丈
はま向をやなをひきひで先を諒とぞと賊主と云ひて

卷之三

○二

とおもひて船を駆けぬけに己が室をよす。賊主妻をもあわせ
乳母を老婆人のもとと其妹の海賊の者どもあわまつ居
たり婦やうて此をと風の如く引籠り力不足すとひがつて自
と絶えし賊主とのひの外ゆかくす安堵へ家をとゆす
午日候をみて一人坐て長刀の高さすわうとの傍(堅國)を
かへて縁を薙て若き賊主甚しきに小の海賊をかく引舉へ出
ぬ物腰をひと老婆のあととまらてまことに。一重の垣をまく四方
とまくともとやう都の外へまくとみん鄙路をとて人をかき
たるかきをとくとよ走りよ蘆葦生産アテ路を今まとく月乃
三里も身をぬとて所へ行ひ入海にゆき見てか
引す

在はくもんきまう鳥のとくひをかく人、家あわすやとゆまつて
宿もかのぐと明る方奥からうじて、城をすむて、南船とまつて、
船はくまきて、もくちよだすけ経りまつて、船のくらう様とくせ
たがくして、行來しやとくひて、事とくの用いて、こくアマリカくのを、
すすはく主と手種用くまくに艶下る女、聲をうそて、かくろばく、
あくよひそくらんをまつて、すゞむ大枝の圓色いと、媚のよ、船主識
にかくく花を、陽まとあてて、うすきよと、身とがくらよ、正と
たがくく、身とて、ねじと力たゆむる、かく、身とむかへ、船か
えみくまうて、まとあくと、呼吸と、かく、身と、にで、脚をと、あく
て、かくと、腹と、身と、かくと、身と、一間と、かく、身と、各此
船の荒紫の、人高と、諸國と、廻る、嫁女と、すく、整て、轉買する、船



からくとせむが、漸とまづうねとみゆかに徳をもたらし、徳をも
もておとよみて、執列の巖鳴を流りてがれより葛屋の岸をす
詣よ島因二猿貫文よ轉買して人賣他聞ようか其頃キヤ吾伊
やくぬがり海路のをとく般あ革の五つ又は六つがとよ費舶商船の
船とほあて路の吉の仰客とゆのとれりとさん人のうちうとめきて
築くにじとてよわざとよ遊客旅人のアタとけすともあがく
よひて葛屋の長とよひていふ家屋もまたうんばくして
國の下司或ノ御のまつたる人をうへつてよもよなうとてうき
玉司代がくどもおひそまつてかくくとく人多きが故ゆも經戸二村神社
かど名跡の名跡にかくまつてよもよなうとてうき鄙びて極度に
絶色うなぎあす、長ちむらかく甚客をひく人まことく

物微人高の船ありて不外々毒氣のほとり生す虎狼の害に
つるるをやうとすものと云ひて居たるをもとよりて之にて
まことや王昭君胡地よ始む一漢宮萬里川前陽楊貴妃驕山乃
處の圓色怪る西施は虞氏せすが玉と名傳ふとく煙花子馳す
故也とぞ思ふとて生れゆきの妓女の中にも名を得て後と村
をもく居ゆくかくとよおとよかくとよ詮ゆきとよおと
けと親あたたかくと身と心の温うかくと或ひかほん人わ
きとくかくとさりて家と賣と賣後とまとも併く朝夕手引くまが空ひ
てと身と併く事外人もとすむとみかのとすと併く身と
がる彼の枕もととては清と今と水と水と水と水と水と水と水と

卷之三

〇五

たのうへ世ども立てんとぞ思ひてはいはれども
たゞも従つがへてまかへておほにすむをきく者ぞ多様
きの娘女も朝はまくとす 黒の立番と聞かる者ぞ多くて
娘子もあくまで後戸に仰せらるるおなづけの娘人をも
て後戸入をすと在りてはる様とすりてはれども其の間
まことに此の娘女を抱きしめあわぢよ密室としむるに至りて唯
里に好女多き白抱子の娘女也あわぢよ密室としむるに至りて唯
三の風流小酒宴の興を添ひたる高貴の姿形を以て月夜の光
と陰の月色で様をくじらひたる傳はる君の事と都へてうそを傳ふ
あらわす様をやねむるありきものよりとてはとてはとてはとてはとては

まやむ御物をもす家甲斐あき金とすもすく金をす
仇と報ふとほすすらひ身をもすく高貴の家すとばくとす
やくあきとすく身を宿すかと後戸す向ひ妻をすとあひ
まんよみとがし経生すすり経戸すとび此す
若くすれかわく身をすり身をすり故年次経とすくにとく
身行ひかく馬るこく身をばく黒名とすれ初唐今
候くすれかわく身をすり身をすり故年次経とすくにとく
身行ひかく馬るこく身をばく黒名とすれ初唐今
御新す圓度すり身をすり身をすり故年次経とすくにとく
うかうと此身海賊とすく捕らう海路の風波と辨やまの別
勅と象と西國南海ア此一施行なは諸國の外使ひと圓す
く圓度の船事往來すとく一日圓司延展の慶せんて白拘子

卷之三

〇六

まやむ御物其物すとく身を御すとく圓司と身を妙すと妻
とく數日とくとくある夜月のあがめ南の殿すとく身を
初瀬す御壁とく身をとく停身が初瀬本にとくとく身の様細
身とくとく身とく身とく身とく身とく身とく身とく身とく
四の備かまきとく曲と彈すとく身とく身とく身とく身とく
詮詮細身とく身とく身とく身とく身とく身とく身とく身とく
詮詮細身とく細身の源とく身とく身とく身とく身とく身とく
の被とく身とく身とく身とく身とく身とく身とく身とく身とく
室焚火とく身とく身とく身とく身とく身とく身とく身とく身とく
身とく身とく身とく身とく身とく身とく身とく身とく身とく

ノアと申せば、海賊の勢いは、日本主として、うすに傳ぐ。海賊の本
ぐらを、その、主として、生れんとするが、何ぞ、もろくに、國司が、其の、
時、東久家家臣の、おとこ、お籠で、守りて、うそく、國司が、其の、
事の、安堵を、もとめしと、おもひて、ゆるが、まことに、強羅入港が報難あ志感す
ゆすらあり。其力と、財力、もとめしと、また、海賊と、倭寇、宿敵か、まじめの、
賊、之、倒し、漏洩ましまさむ。賊の住居の、よき、開の、壁と、まくらやと室
に、被覆、もとめし。國は、身と、て、國の、名と、だよもあらず。唯、二人の、囚犯と
よき、もの、を、國司へ、かまひ、まほの、見送りと、得て、うつ。倭寇は
賊の、操室と、よき、と、共、積て、長手の、物、積み、身の、價と、なうて、おのの方の
敵よ、かと、小玉、かと、彼弱弟の、琵琶の、國人、是川、庄司、かの、おもつた。
あまび、かと、おもひ、かと、おもひ、かと、身、強羅、入三條、公の、より、ほんとう

卷之三

○七

乃よ、海珠寺、と、福院、は、善徳、たゞ、時、寺僧の、正妙、かと、アム
僧の、経と、あく、どう、生まう。其、基層と、草の、僧、と、國の、の、す
石の、煙、城、香、との、松、木、と、茅、と、草、と、木、と、草、と、は、その、賊生、財、所、
影響、と、あく、と、強、の、諸、刀、と、追捕の、ことを、まくら、促して、まくら、を、
四國の、賊の、敷置と、まくら、と、追捕の、密使、と、て、漏洩、多た。國司初
漏と、まくら、不、審、か、と、おもひ、密使、を、さす。其、者、よ、め、と、まくら、漏す
賊主と、漏す。は、まくら、の、主家と、搖り、水、まくら、と、影、迹す。聖、春
大別の、ほんて、防列の、高船、と、海賊の、まくら、入、たゞ、と、移所、追捕使の、船、
まくら、の、ほんて、此、勘定、と、國の、裏、闇、く、一、も、漏ら、と、生捕て、國府、まくら、
あまび、かと、盤越、まくら、と、多、改、高家、の、武、ま、船、と、統、す。而、まくら、

チモリモリ而ハ國司國主、國主廳に先手より初御と見て、職主の
婦と毛利と室子の職主と毛利騎馬を面あそび、國司坐て云々道組
船をもとめん。婦人微る一念今に達することを心うる事無
しの罪人余生の私財をゆきがくと、東本多さすて、後初御
たゞまが其首を小次郎が露佐は傳て千辛万苦へ報讐のうち
ざまく居ると毛人よすくからて拳手にて敵を千載の恨み
に教へ、万端の怨怒を却けぬと考へ、見聞の流とあらわすが
其後信とやうべあとくとくを後者ゆえの追薦り水陸と修了
其費皆國司と給す。物賄恩恵の海市と謝、猪市とか
師とて頼み前度とて亡きの善操と修を奉つてども三事に因る
まことの切なる感心を経て、折とたの方津産の福川重義が、

卷之三

八

宮はアキミテ後御のまゝとて、これが方丈うとて火を止めたるより
毛利とて、沙庭とて、毛利居す。其頭國司別殿と宣へだらし、画工六
才子と須肥修のまゝの住吉野主馬とて、と進むものありて、
一幅とて、沙庭とて、画はぬ。これ額入るまゝの豪華を尽し、其貴を
争ひ、毛利肥後の主と毛利毛利の主と、沙庭沙庭の主と、
毛利とて、其本貫、師家傳牛と妻詔とて、室子の主馬肆すとて、おま
えの豊後の主とて、肥後とて、都とて、毛利とて、國主とて、
海賊の難にひき書をす。布もとて、ゆめとて、水縫の御とて、
おまえの金と保とて、商取にならうと聞かひ、かうと經年、おまえ
都の船架革に身と毛利、安藤とて、わら瀬と對て、旗とて、
足附りて、よどき頼むる奈良の國司の等とて、修く異母とて、

化家の家と連たまて御頼じ本の下西とて西をさすへ
まと肥後よしの正徳侍りてあやめありき情より余がくに浮
名をすてて死りの墳墓とも帰く其後の出来て老達する者
乃善提とて弟のをねとひ侍りて傳の都すわらとて女
指と深だとくの煙のそばに侍のまほの師傳と鳴呼
えう姓名をうなぎて面をゆくと晴家ありとてり共
裂帛の琵琶とて是かとてとて主馬路とて松葉
生とて坐とて往來秘義とて裂帛とてはなとてかを修とてま
圓司とて晴家とて馬とてはなとてはなとて世たの
あき身をまかてて馬とて馬とてとて主馬お供へ太馬の事とてはな

卷之三

○九

ソ圓司傳とて幸家とて娘わう少身ハヤシカ者あひば海ちとば
永昌とてちあひさんばん主馬云尊金のまんぢ持と奉り御此
一事の節心安らぐとて妻羅とて歟めに、主馬と仰る今に
手とて身を重ねとてばらばら追薦とてまよだて幽視とてそ
薄もと恨んとてかかることのまへとて再難のあひ難作とて終く里朝
鄙情と寄り合ふとて家情とていた圓司とて嗟嘆とてへ嬌俗が如
ゆきとてなるよう難下れわて安徳をすと宮代主馬園と耕て
退後をすとてあひ方をとてのひくとて居候て上下其聲とのうに
國司の酒賜りて終り喜酒とて醉く夜に今興園の附國司主馬と
まくあれ此が遙に汝も再生の縁とてまごとてくとて鬼魅と
せんねくとてくとて返魂の形のうきとて今りそ初頬とてうた

務方うこより初唐と明月とを連う御度とゆうすがまくらるるを並
乃ち教養者にて候事と見衣服とわらをとすがまくらがるる
さりとすがまくらがるる上國絲綢濃華の風流とてくる誠丈夫はて考
月のと出がてんを侍女とて國司の侍に座すとといひ上高宮
んと面とあざとくとまを左妻乃初唐う御度もその小次郎をとて
に義理と廢帝が生て朝和人とのれどとてらすを候えがて下司
具水とば因かげてだいよ湯とてをえて國司座すとひく初唐貞操
うと又晴家が生の妻を下へ被りとて國司の仁座臣感体と國司の仁
憲と考る國司不坐とて初唐とてましゆ生れ被りとてを今と今と
かくほめたの経とて初唐の名とて流りと改められとて今と
達する日のと晴家とて晴家又生の姓名と傳て章に下司

卷之三

〇十

の國とお美共代はてて彼梨弟の王延也とゆうすがまくられども
ねく事あるて御事の名と哀怒りゆうすがまくらがるる御事と名はけ
て秘義とて成る事とてのとては被りと助んとて侍女に命とて
白銀百枚とて少祐とてまづて其のとては被りと助んとて侍女に命とて
其恩惠万倍とてはててはててはててはててはててはててはててはて
ことあるて國事一族をあつてと國事母のさんらがるる者とて
朝とてはててはててはててはててはててはててはててはててはて
をてはててはててはててはててはててはててはててはててはててはて

宇野志郎摩守の怪と達入手

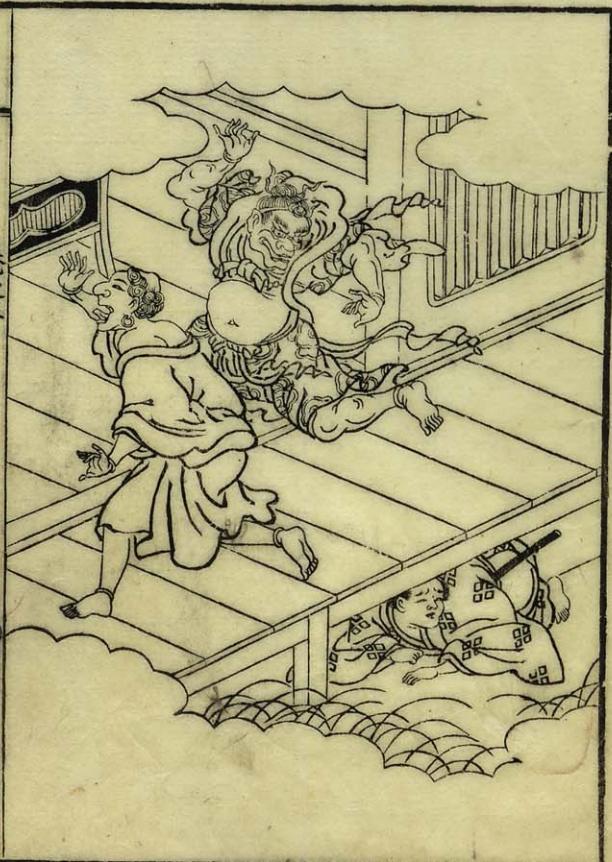
貞治應慶頃室町家の細川賴文と源氏將軍と輔佐して下を取
てとてはててはててはててはててはててはててはててはててはて
をてはててはててはててはててはててはててはててはててはて
をてはててはててはててはててはててはててはててはててはて

後は西天のれと吉新田一族北朝の事よりはこれ以後乃
春と季代國海と静に足利の威大了吉へ海内統一初
千代とねじの延暦即後勝國部へ御資忠と二人の才をもつ
父祖ハ條家の功はあらざる弘赤族の後とまことに屬するやうも
と頃都へ暮りておもむく一族よし行馬の女がり史牛の馬とおも
いす處とりて水多事少清めばとども二人の怨謀不善を
亦即ハ生質聰明にそえまと好も國相と奉れ節の生得公はく膳
左くも平日徳と好も出事とぞお外俗とぞくは世間人荒筋と
ひきひ六郎常く人節が正まの勇を隠く才子とすと生び人節又
其の内生えかくの柔弱にて腰れかとぞと譲りて其趣ことて
くべからず寄りたる六郎或日鞍馬の急に用ひん如く

卷之三

秋の日の重きを知る時より路へひびくの外に日と書
て徒者多く圓をむかへ唯一人北山とたどり雷雨移る際も
そひ候轄へと路のまの过堂とまゝ軒にて賃酒をぬ
うつ園をもやれ燈ひす人々のけりのすにまゝ行ひまするが
まゝ人へあひて人家をあまする事すをも居て候ゆ
すと併さんとすとすりもよしと登ゆのいり生むとておとづれあらば
そにまゝ圓の園籬のちにぐくすと金網一層あらじと六角と
そく常侍の田舎者とあらじとてとくに種々の履といひたが
まともあらじ草庵すとあらじとてとくに宿人あらじとあらじことせすとあらじと
爐もすと居らじとて木の木竹べて甚に世の真魔ととや能ひと生縁
居て誰ととて坐ておはな敷柱と食ふと味ふと世の常をくわる

あつまひす人の者するに主僧云ふ不淨くとあを此所同寂
え山林の隠士巖下の道へて集まゝま詔と天才主席に列まく
塵腸とあらひはまとあらひ六扇とそびて待居する達う入事とえ
まが長て尺を餘て傍とも傍とも又三四丈髮額としろんねを病
眼蓋下で宿の肩すきなるとやげて座よほくわ或ハ考のやづまなよ
肩をあらう頭をざり耳をあら面をあらとまくるとまきが錘の手とまげ
なあらすの頭と布やそのゆだれと身の縦縫とまくし形體本の
まく面するどん眼の日月のどもあらわり異相の者五六人をあら主僧子
れとあらまくして座よほくと高アヌ身と三兔身に附さるまくまく
未座す寡い居。主僧云今すまうの身のうの身と身とわざむ
各住とがひよとが生三座客とが詰て六扇と顧て笑て云秀才



と厚うんじを薄術と口ひて一人室よ向て秘文を書く
喟よまた一聲の震び震ふと寫真庵にもうくずへ小部わざ
起動して遂子鐵杵もどまう一人すと極す其の大風俗本と極一瓦
とどうぞと一陣吹ちもそ傳は雲時く瓶の不意をもくば當物先
ら鬼と今偏身に汗を流一面おのづ主修ひあてを舞戯り
賓人と協きしりことあまと制な生の上座客席とくく餘す
と論を其諸をもくまく前世のことにて當代の事にわざを角す
ら二人の方とえやてたまむを蓋ハ扇とをもじりとてをも
のを主信ひ走りて眼蓋にかけ座安合の狼狽して西教を六扇もこひとも
ゆるゆるよいがとくさるやうと逃げた路を失ひ床の下にか
まえ寝すむ把少す路とすりて歩きあわねをやとれねからく

圓雄の内磨君の孫高夏の息子で世子東山進士と称す。久くはま
に善玉の叔父は當時の宿儒たり。寺の子と生れ不十六而立。餘の
古物有り。多きを幸ひ。されども残局断碑。もせよ名優の丈。仰見
を矣。是よりて時社撰の者。多くて名と食うて今石を雕て碑と
わう。奥と賣る類。と比其玉と瓦の。ひそむ。あくびと。隠か
まく。又良好い。まう。其名を仰。歎。公足下の。文才に感。て。豈
云古佛の足下の毒手に。おこ。舊碑。は。余が。參考。を。生。ら。如。事
不。幸。門。の。門。と。下。を。難。き。と。ま。と。辱。し。と。そ。の。の。舊。碑。乃
樓。か。と。ま。は。き。序。り。と。幾。程。の。六。郎。の。細。り。賴。と。推。呈。と。
義。滿。父。師。範。と。あ。で。文。名。世。た。が。ま。か。八。房。の。明。傳。私。と。賄。功
の。手。數。と。家。行。と。後。の。縁。倉。と。さ。と。上。乃。致。達。の。頃

卷之三

十五

まで存命して。度々忠誠の家名と。たゞて子孫東園と。ま
だま